

水稻の収量・品質高位安定化へ

ザルビオ J A初導入

新潟・J Aにいがた岩船

【新潟・にいがた岩船】J Aにいがた岩船は、栽培管理支援システム「ザルビオフィールドマネージャー」を2023年度から導入すると決めた。J A単位での導入は全国初。管内で生産するブランド米「岩船米コシヒカリ」など水稻の収量・品質の高位安定化や、営農指導業務の効率化などを目指す。4月中旬の運用開始を予定している。

握できる。そのため、元肥や穂肥を施すときに可変施肥が可能になり、圃場全体の品質・収量の向上、均一化につなげられる。

営農指導の面では、

端末画面から圃場の状況を確認できるため、

より効率的で効果的な

指導を目指す。新人営

農指導員もデータを活

用した一定レベルの指

導ができ、人材育成期

間の短縮が見込める。

J A管内の水稻作付

面積は、約4700㌦

(22年度)。J Aは3月中旬に、水稻生産者に作付けデータの利用承諾を求める文書を配布する計画だ。

J A営農経済部営農企画課の磯部正人課長は「(ザルビオの導入で)J Aの存在価値ともいえる営農指導業務を改善し、地域農業の発展や岩船米のブランド維持、生産者の農業所得増大に貢献したい」と意気込む。

J A全農にいがたは、J Aから導入の相談を受けた。担い手・営農支援課の清水勉副審査役は「全国でも導入を検討しているJ Aがある。J A全農と共に全力で協力し、J Aにいがた岩船の取り組みをモデル事例として発信したい」と強調する。

営農指導効率化も

このシステムは、人工衛星からの画像や作物の品種特性、気象情報などを人工知能(AI)が自動解析することで、圃場(ほじょう)の地力や生育のむらを確認できる。病害や雑草などの発生を予測して施肥、防除などの計画立案を助けるのが特徴だ。

日本では21年4月から、J A全農とBAS Fデジタルファーム

グがサービスを提供している。農業法人や農家が利用しているが、

J A単位の一括導入は、全国初の事例となる。ザルビオを使うことで、圃場内の地力や生育の状況を「面」で把握